

会員の広場



実朝幻想

須山 茂樹（東京）

「箱根路を われ越えくれば 伊豆の海や
沖の小島に 波の寄る見ゆ」（新潮社刊新潮
古典集成「金塊和歌集」、以下同じ）

よく知られた鎌倉幕府3代将軍源実朝の和歌である。おおらかな、風景を目に浮かばせる名歌である。「沖の小島」が伊豆大島だと

言う人がいて、びっくりしたことがある。伊豆大島は小島ではなく、実朝がいくら目が良くても大島の海岸に寄せる白波は見えないだろう。小島は熱海の沖に浮かぶ初島と思われる。

周知のように実朝は政治の実権を北条氏に握られ、失意のうちに28歳の若さで甥公暁に鎌倉鶴岡八幡宮の階段下で暗殺された。小学生の時、実朝の本を貸してくれた友だちがいて、孤独な悲劇の文人將軍に心惹かれた。以来実朝を少し研究して権威になるうかと何度も思ったことがある。が、思ったりしたりはなかなか出来ないものである。

「大海の磯もとどろに 寄する波 破れて
砕けて 裂けて散るかも」

これも万葉調の、素朴、豪放な名高い歌で、私も大好きである。しかし、一方何もかも割れて砕けて散ってしまったという実朝のヤケの心の底が伺えるように私には思えてならない。「虚無、孤独の影が漂う。」との評（前掲書注記）もある。

また、彼の心情を偲ばせる次の歌がある。「ことしげき、世を逃れにし 山里に いかを訪ねて 秋の来つらむ」

秋の歌である。俗世間は言葉繁く、小うるさく、わずらわしいのは今も昔も変わらないようである。

ところで、私の娘は「有里子」という。秋に生まれたので、「百合子」にしようかと妻に相談したら、名前負けしたら困ると言うの

で今の名になった。幸い私に似て??美しく?育ったので「百合子」の方が良いと今でも思っている。娘に、名前はこの実朝の歌から採った、山、里、それに私の名前が歌に入っていると言っているが、娘は承服していない。

…これは幻想でもなんでもない、親バカの私事である。我々の世代では公の場で配偶者、子や恋人などの個人的な事を述べるのは避け、やむを得ず触れる場合は「私、ことですが」と断るのが常識であり、聞く人に対する礼儀でもある。最近プライバシーの保護を言いながら、放送などで私事を断りもせずペラペラしゃべる芸能人や文化人が少なくな。どうやら、私もこの悪しき風潮に汚染されたようである。実朝さん、皆さん、ゴメンなさい。